柳水亭種清作
楊洲周延画
初編
初編
中
初編
五人纏苦魔物語
櫻澤堂山編輯
初編
上

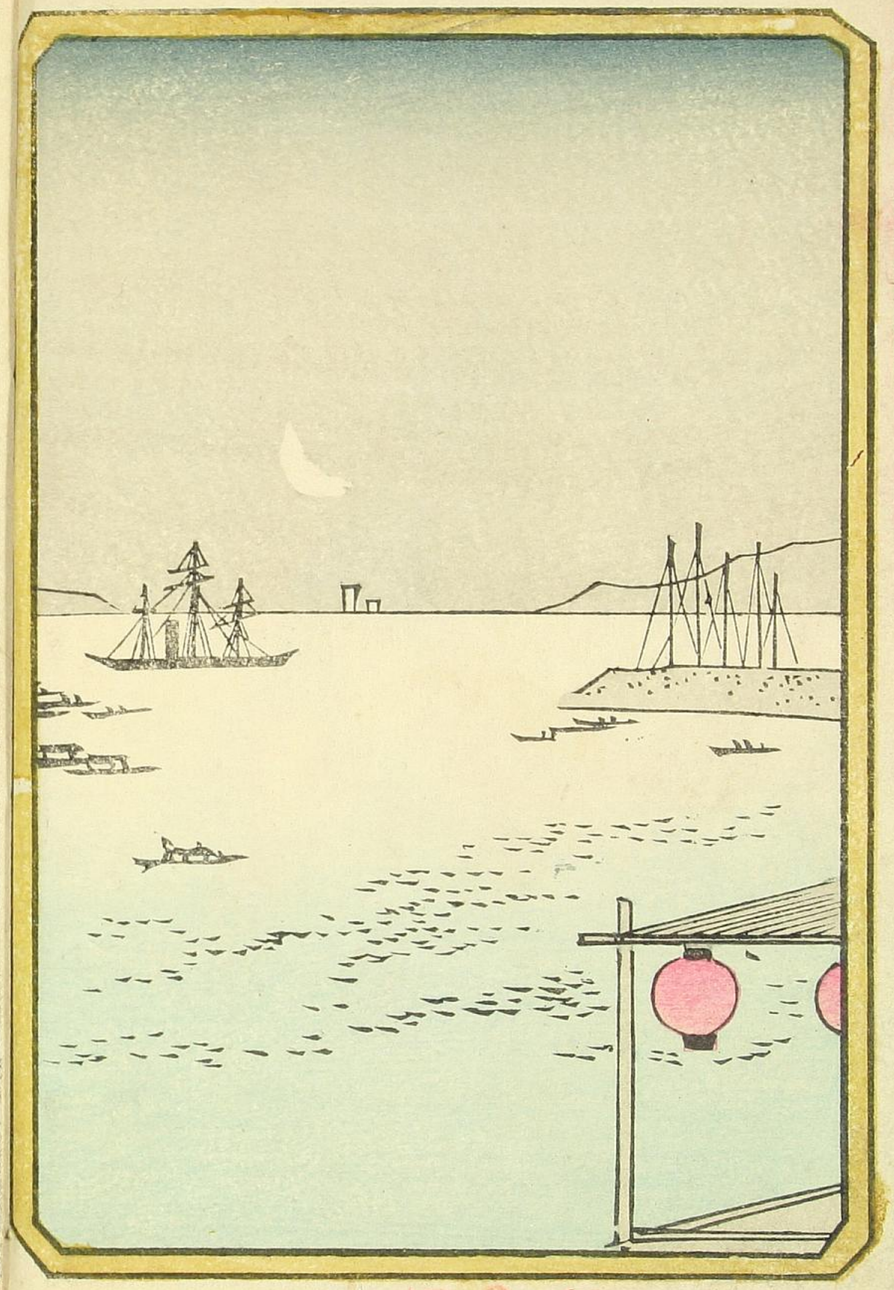
五人雛苦魔物語

櫻澤堂山編輯

初編

上

冬木阿蚕豆



冬-8/60

冬木豊吉

冬木門弟
日葉三吉

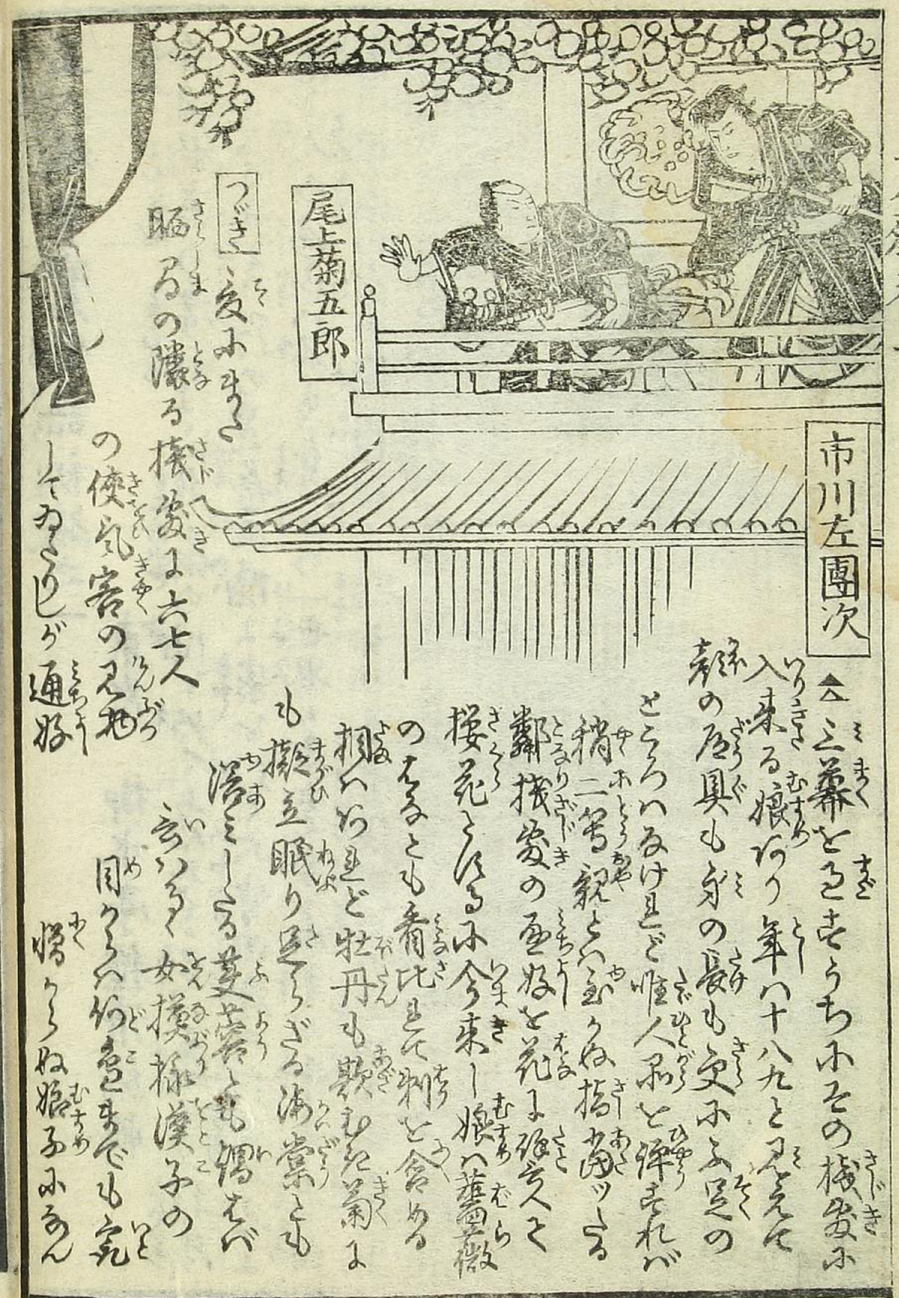
A463
1

五人織苦魔物語初編之一

東京　柳水亭種清編輯

今日新年の書初よと弁慶の風を仮てめんどうな足の表紙より粧廣らうなる武家門の芝居圖境まで書をよく大宇田庭の松云をまるまる人の海山い名も鳥京の一世界ぐるみの風流の家の綺羅飾る粧ひよ有係数方のこん和ま眺額て腸間通ねとう戻よ立しぬ年賀いよ人ねりのぞあ々是を主人と准ひのやとつ同へ上京の巷市の之間よ住む

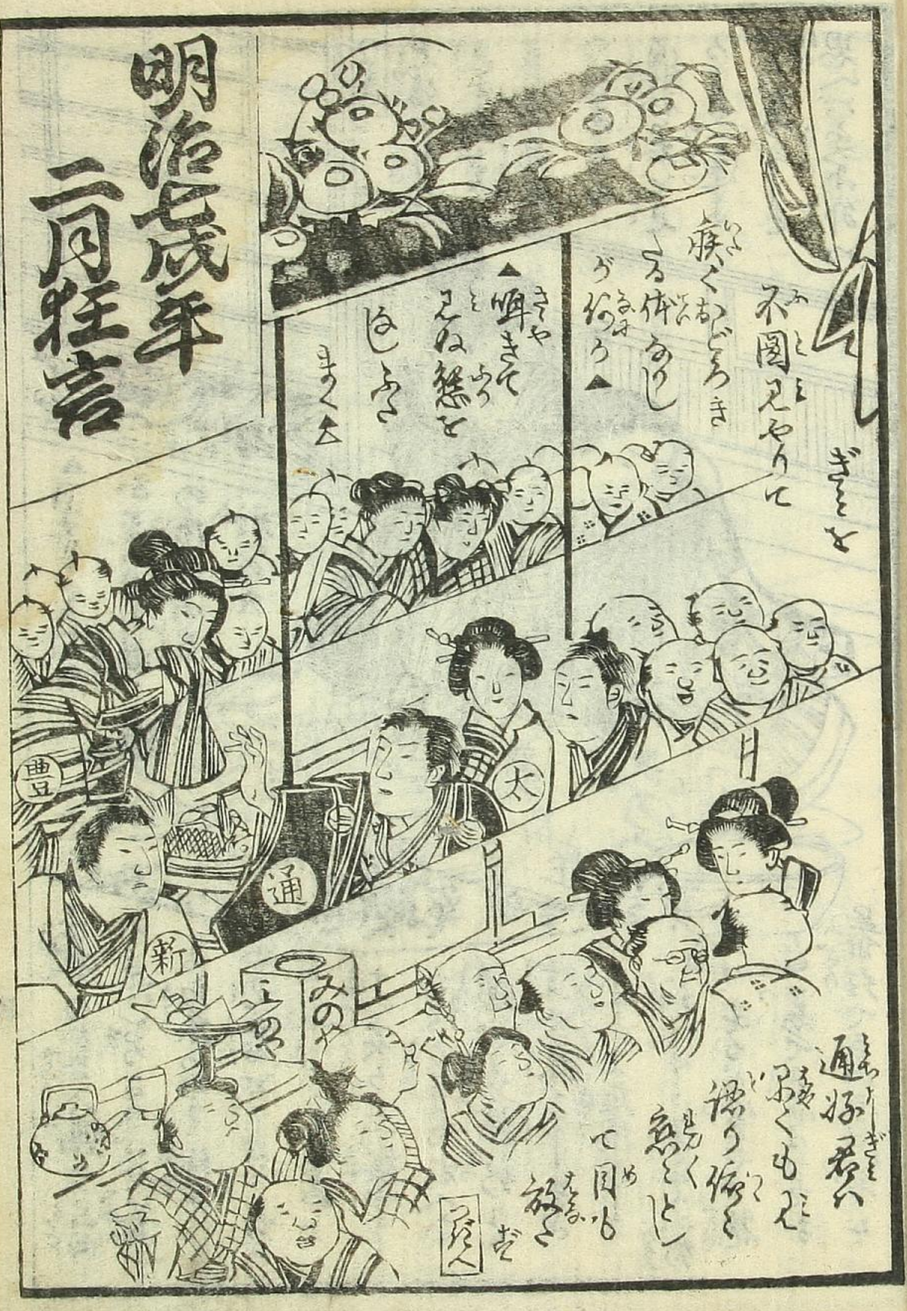
吉濱文之助



つゞき

◎三幕をさそうちおその桟敷ゟ入来る狼ひう年の十八九とおぼしき娘の召具も分の装も更ゟ見のさろうやるけ是ぞ唯人ゟ和と伴それば猶二号親とおぼしき婦人ゟ指添ッる鄰桟敷の重箱を花ゟ推量と接充ッる小今来ー狼ゟ藝者撥のそなたも看比ゟ元判と含める相ゟ也ど牡丹も敷もの紀蒙ゟも擬ゟ眠りほうござる海棠ゟも酒そーる美女客ゟも獨そべ言ッろく女擬猿漢子の用ッろゟ物ゟ色まで也完ッる仮ゟ猿ゟ狼ゟ猿ゟみのん

明治七戌年 二月狂言



ぎとを不圀ゟやりて

疾くおどろき召体ゟしなろう▲

▲呼きそゟね怒をしふ

まく△

通好者へ

ふくもゝ

揃う仮ゟ

急くとし

て用ゟ

放さお

つづき
足結て弥
足も俄ざる
うちふ彼方
のむまめも
通好名を足
るよう一途よ
アナうつくしと
思へべ文弥

▲「さざどう」「ウウ
おとよさん濃
の様後の旦
那の
形ハの▲

▲弥のお出入場のこ間
のさしろさゞぜ父弥
よち松めつさ
おとよ番をしざっる
めへせ「アそやア
十六実ろエ「銀ぐう
ゐらをくもねへお
濃ざる濃わく
笑て来るーまぎ
「ヨまのよ松ゐる
ゐーさろろ「彩
まるゞ空やト抱ぎ
つまてヨまる「ヨお
呉弁松でのハヨ〇宮と

足をも人間も私を
足てまるを一盛
の濃のおとよ用ひき
をそ紐ひきお豊う後
易くくトふ声
でき文どむまめ
い一ん乳も悪
うぞーそ足振ま
まるを「ヲイお豊さん
と背中を打つ豆と
指手拍」
「ヨそ名
ふ「好こ人い
濃うざらう▲

おさゐうさ名で仁雲のまた
「ヨ様ーんと充ちづつさ
耳び角已ら様変ホ「ヲ

「つき」 夢ひとうの漢み身ぶるして ▲あくるサアくひ方へ這入る芝エ乳の早くくと頻つふ起立て歩いて参り 利右衛門 又睡るのさどふ刺ろうヨアノ 私わ四郎へち 義 めんざイヤ 手柄の味 突き

どざのまを四郎魔さみでもさう お執奏を称ひ食わじまをト 演劇の

あつの ろうざさ 通好作 い廊庵も雲雪も お次もろく耳とひとう 迎火のつろ体より入べ 且那がまへとろさだの 満足ヨー 冬木の 狼ふうよくマア 尋ねて来て呉さ 妻のおを築地ろこ田の 屋イヤ矢張こい築地で▲ 迎ひ 殺奴とそもろ 「ヤアくあろがさろく 一番くと狂言の 脚縄のつろ天引は 貴くも腹まざろ」ろ十二ろみ 招よふ刺りその 護の ろ着 練ーてやーるふろんとを 明ひぜ表明ふ暗をろく

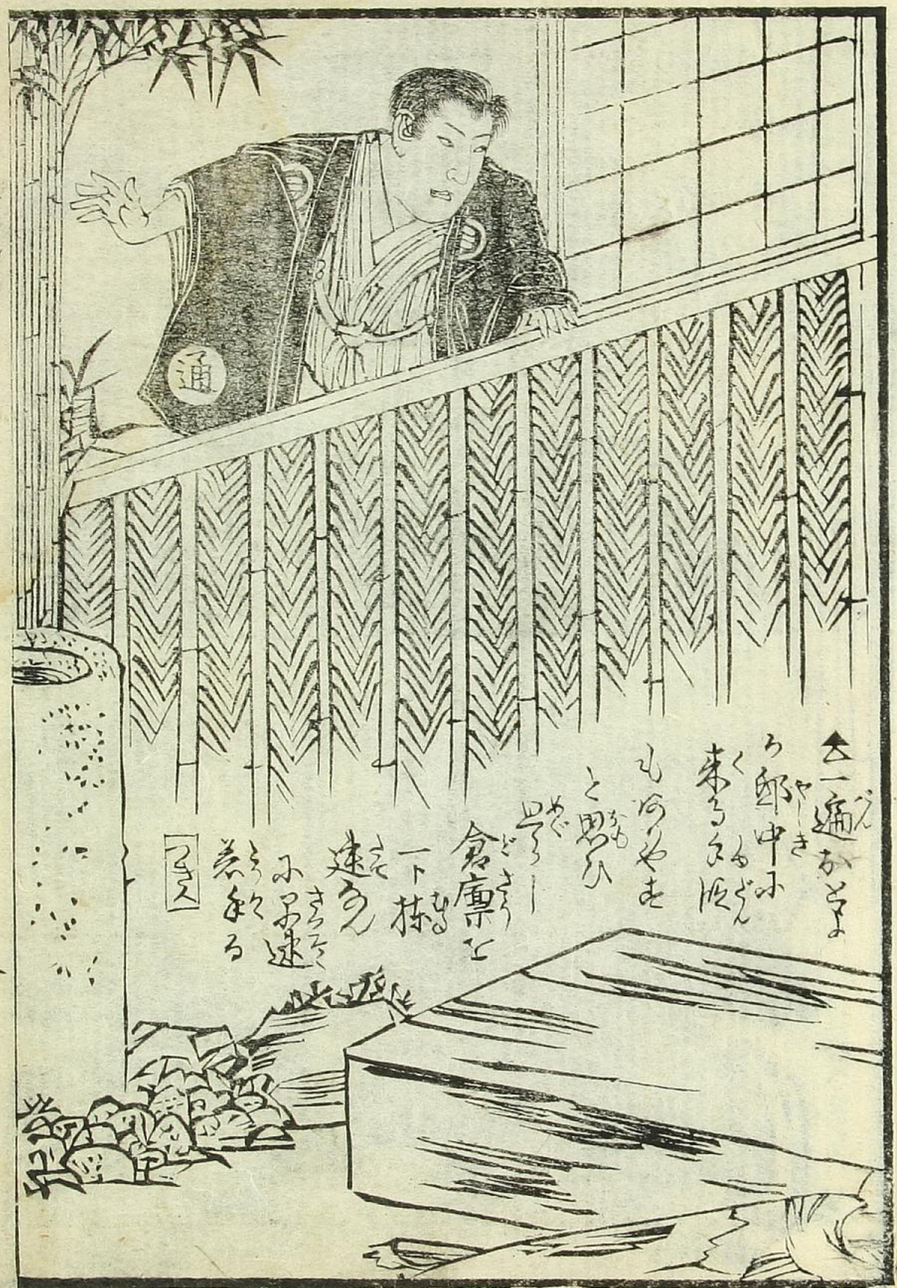
つづき

三田の中きえぬら
しめその經おとよと
ごろくや日車と冬おぐ宅よ
利吉ー
此よ夜明しと
暁ふの羽二日もおとよ
と苦よ守田座の
芝居こおもろある
縁みやおとよあろ

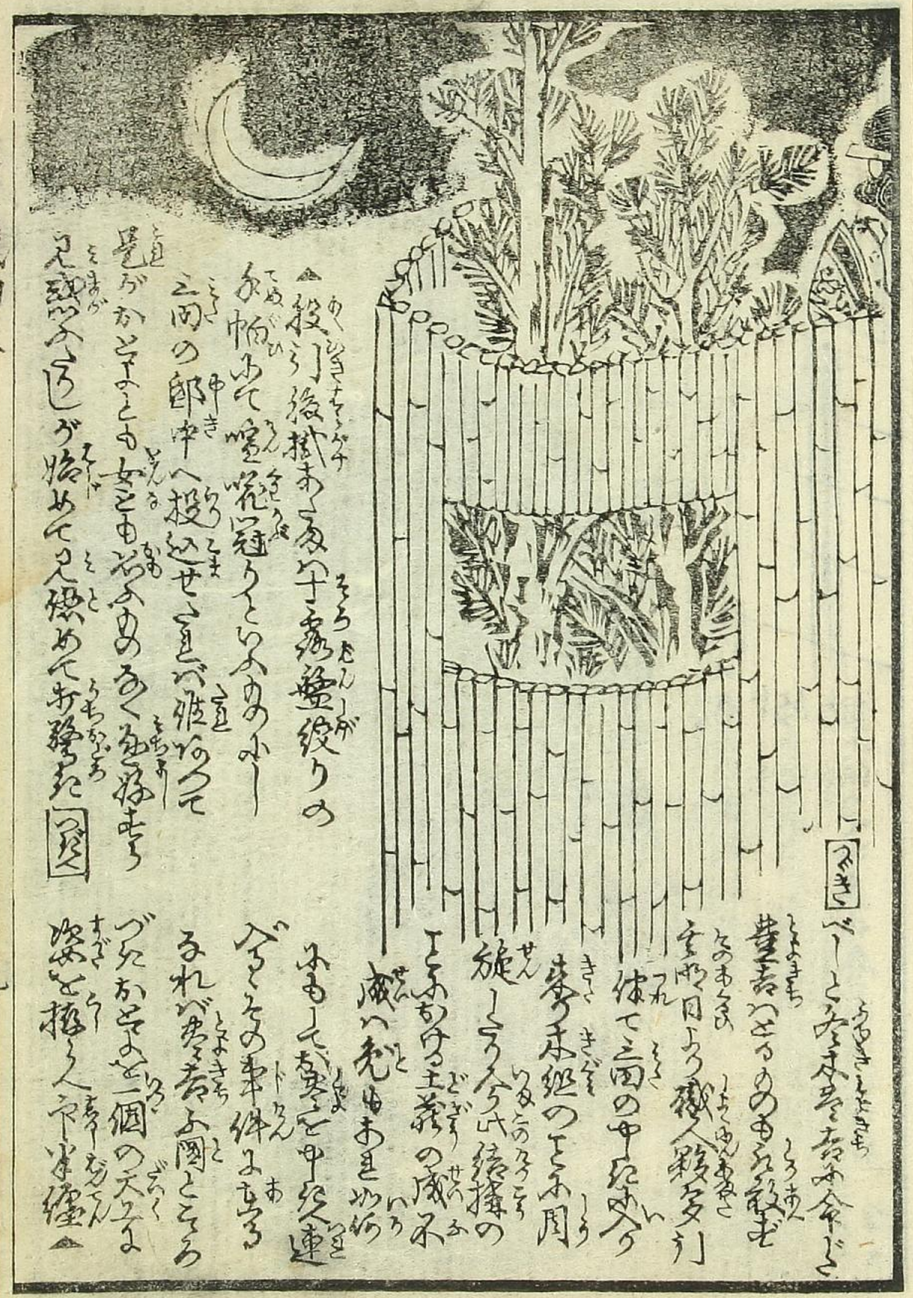
▲ぶん夜も日も
うまそことえぬ
苦八国よて色好ぐ
性親い
あつて
みだが
ゆー
▲拾来
富貴の家
みとの妻妾の
ひとうふうみとも苦ー
ううねおぶうみ友み
つづく

つゞく その我儘をなを
と雅な細工この
脇間家の内室の
の方といやんど
を数上掛よう
迎へる女房
み且べ見み
のこ憚りて
とまで
絶女を

▲家へ入まを
かの娘も
祝儀言とお
焼もしまづ
を数起のさら
なとして十月
小▲

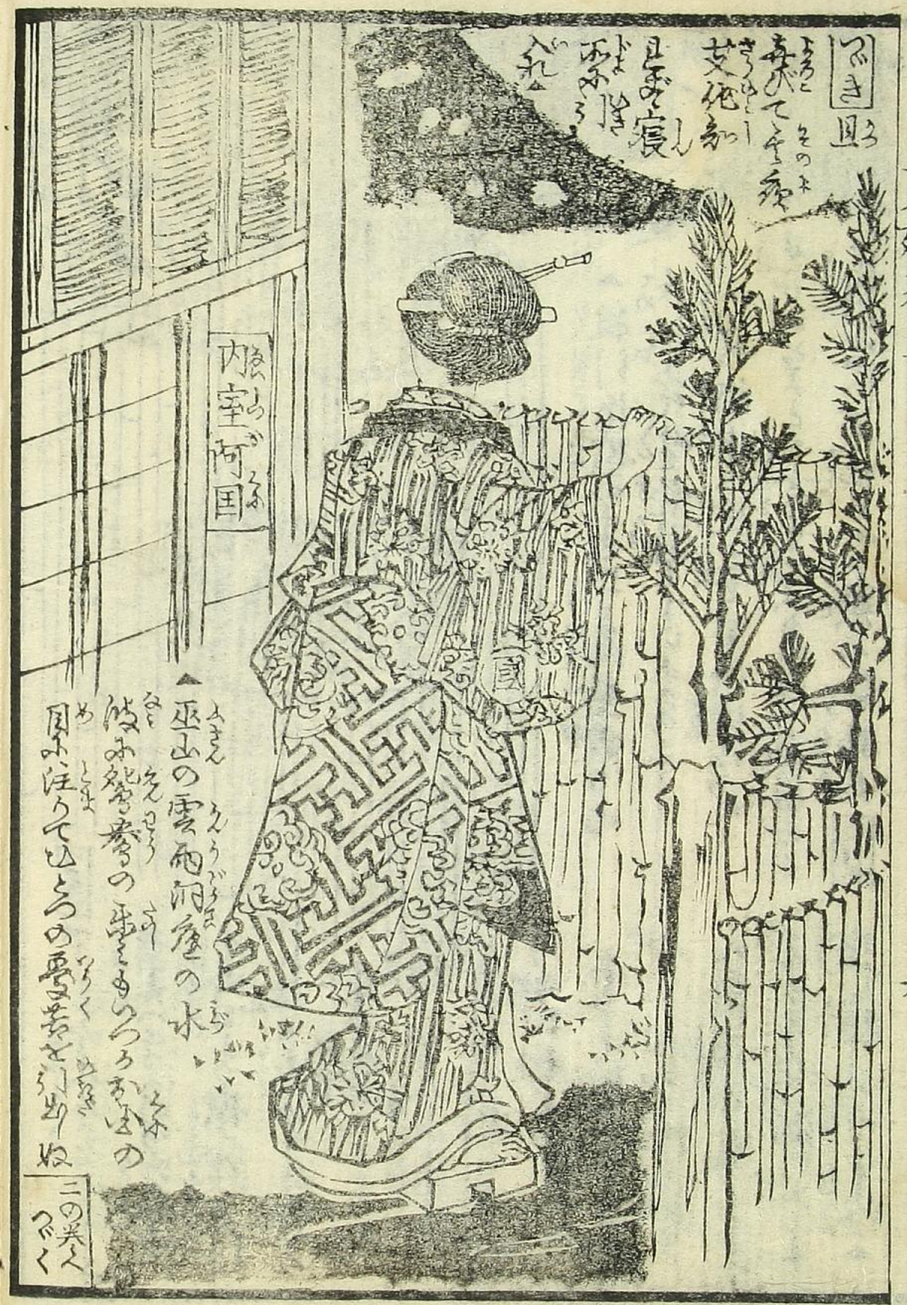


▲一遍かそよ
ろ郎中小
来る
もの
と
倉廩を
一下株
速急
小
つゞく



▲投り後捨おく多の千歳飴
お帳ふて喧嘩冠りとの不
二両の郎中へ投込せさま
曼がかそよとも女ともわよめる
兄弟不足が始めて歩移た

〔つぎべし〕とみまもおの金ごと
普表つさるのもろ歌せ
主吟月ろ獄人戦多り
体て二両の中ねめ
夢永組のこふ月
旋ころ今氏結揺の
こふおりる主義の成不
滅い先もあま物
ふもしてをを中絶連
今そその事件よもる
れべき若お岡ところ
づたおそよ二個の天よ
楽を指人や半像▲



小倉山青樹榮 昔日新話 泉亭竜亭 二世正作 初編より追々出版

這ハ徳川家の旗下小青木弥太郎小倉菴長吉。唱妓賑ひの春情の事寄暴借強談の悪事青木の細君艱難辛苦を記し繪入の草双紙の絞りたれど近世の珍書なり

假名手本忠臣蔵 露光作 芳虎画 中本一冊

延壽百人一首 玉蘭齋画

白縫物譚 豊国画

初編より二十二編マデ刻成 故人種員稿種彦作 永寿堂より人當今日ニ至リ迄二十二編ヲ刻成セリ

日本橋通二丁目四番地 小林 九屋鉄次郎校元

地本錦繪問屋 延壽堂 校元敬白

初編

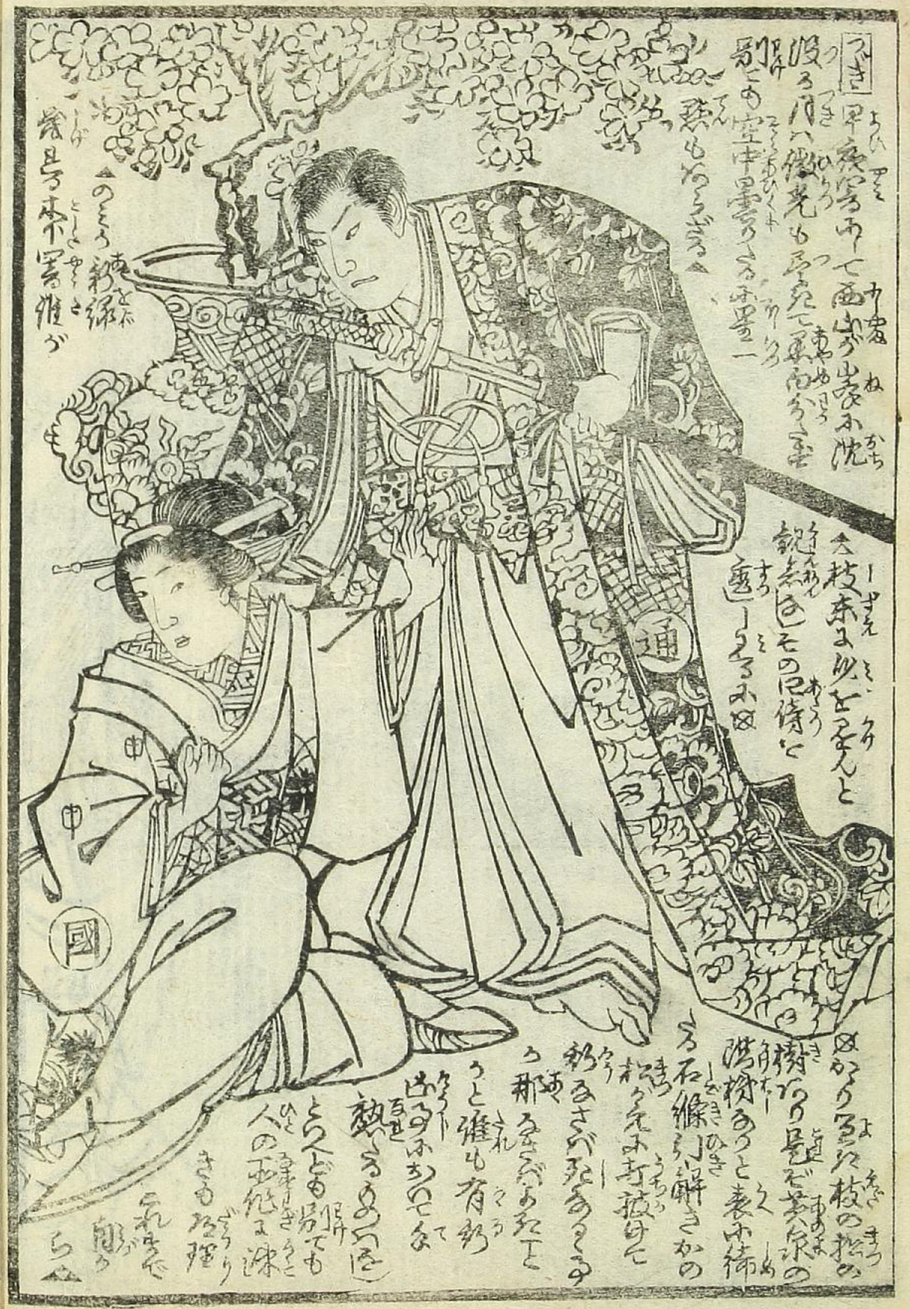
中

五人猟 苦魔物語

初編 中之巻

経清 閲

延重 画



うき 早夜なるまて西門が出來ぬ洗
心の月に傾光も長えて暮れなん事
遅もなうござる

大枝赤き沙をそそんと
銀杏(白)その已待ち
遠(一)ふるみ

樹なり星で美容の
渋柿みうと表ぶ待
る石猿(一)解きかの
おうえぶ打拔け
ぬるさぐあるとう
と雖も有ぬ
出ぶおのそな
熱るるめ(白)
とうくる場でも
人の恋能よ深
きもるる程
これきで
ら

ろ転もえろうるる不息をら(白)
そふおく方かぶどのもろとふりろ
遊ぎこふ走て「ヤレかそよ手指不怖ぶるとふるの分をくお
りやとうの事とかそよふ奴家事(白)げぶ「四
奥橋の左手る(一)ぶそのふ奥さふ不足附られもうる
び歩数さもやせぬうとそれがろうふ数ごま
まると奴云料く慄へて足ると西寝ふかそよの
背脊をる「アラ礼のちいさ花女ふる先どもいは
家の主長ふ左るものを何奴ぶろうるべき奥
ふもせよ家村ふもせよ柔女不指でも判ま奴ならべ
何奴でも食物害不害世界廣しとのみと蛍も柔女の
外よでをわれのぶ又と双個なりへせねとぶく
るかほをる性のふびふくの法と上礼し奴
おせよとふろの女を後妻よまる(白)和教そ
その教よふりて和を気もり人の奴盧とふぬ
さらさひ今有ふ害終て推なろて知るのかけ六此を待りのふるた(白)

つゞき 木の松よ昇りつゞきの猿ハーを
ろろう此時家投の義△

▲時きこと叫び拳しくも勧定のるなるみつたおまのろふ向
合いせんと俊宝み投りて
ろそ雪み伐傭偕ふちき
ざまべ添くいぶろ彼方ひ
方とろねまどもがざふ△

図ひとつも玉ふ不
称ろのいき亜狐

図しても投ーてよくと悠液投初
墨を喫ろし二人のものみ投けら旦
俄宝よ今ろうし義明へ
それくく
労働て
二人の僕と

丈

▲ふえもろらせぞ只視
並べ座門の開きそろうろや
と生ろより立出て次分み添
園まを約てろるふ右木の松ふ
ひとうげろ雪ひ時ちまの危

▲納屋
ふ休
息せ
て後内

家の時

◐特くと阿ひまかろもれが
よふくみて口を舌ろ狐木
の後るめぞ投とそ構る

もつそを義投
と只一投と
斬まるを立
吟ーろ阿宝
ふまろ兎当て
もつと推止め
流るふ弱もて
保ろへと淮南子
のろ思ふ逆投
ちねろうこの奉へ
るを持めて当日

通

それ彩のお客るめ父る
若ふ風俗着ろうぼま投
を手出へも止めて土

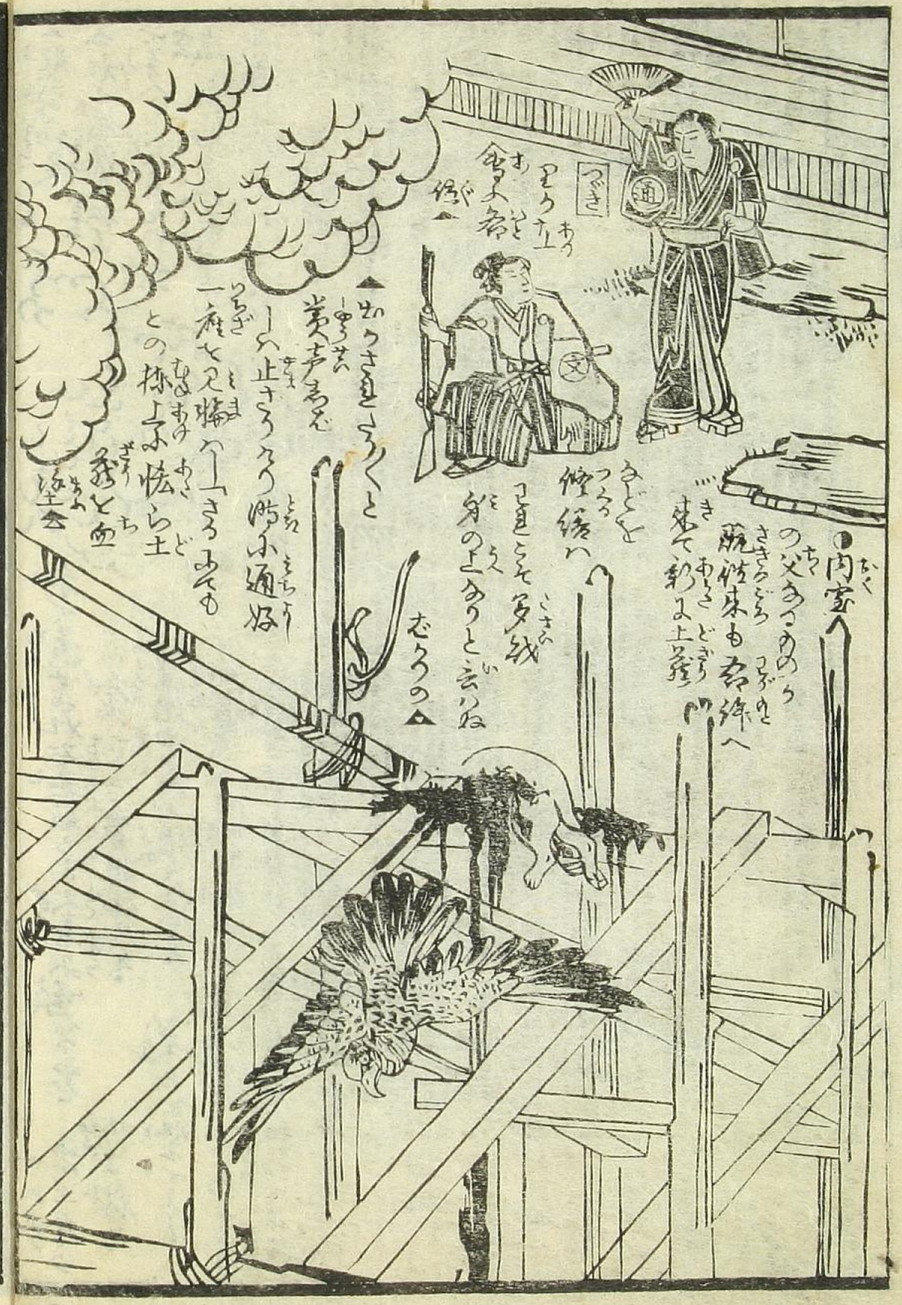
ふくも石等と投まるも掛て
着きろく織を絞め一足売よ松の
幹と投まんとまるとるるのろ
兵助だやとを後りちふ
の細腰のつ抱へヤレ
早矢たまろとろな
ろ投かる
ろーた挙止
とーたまのそ
淮ち来まるろる
ちり彩ろ家の僕
の新吉ち助多この体
をそて作時色幹よろて
前の給しろ多ろきそ
内室を幸くも投け郎ー
ろちふ給るもぞ

又半ふ投ぶちしふ明今歌ふ
まづろ最さま新宮奉と
出帯るもな家の大病みそ上へ
ーろ鉛れぐも
大工多ーろ
ぱ偽

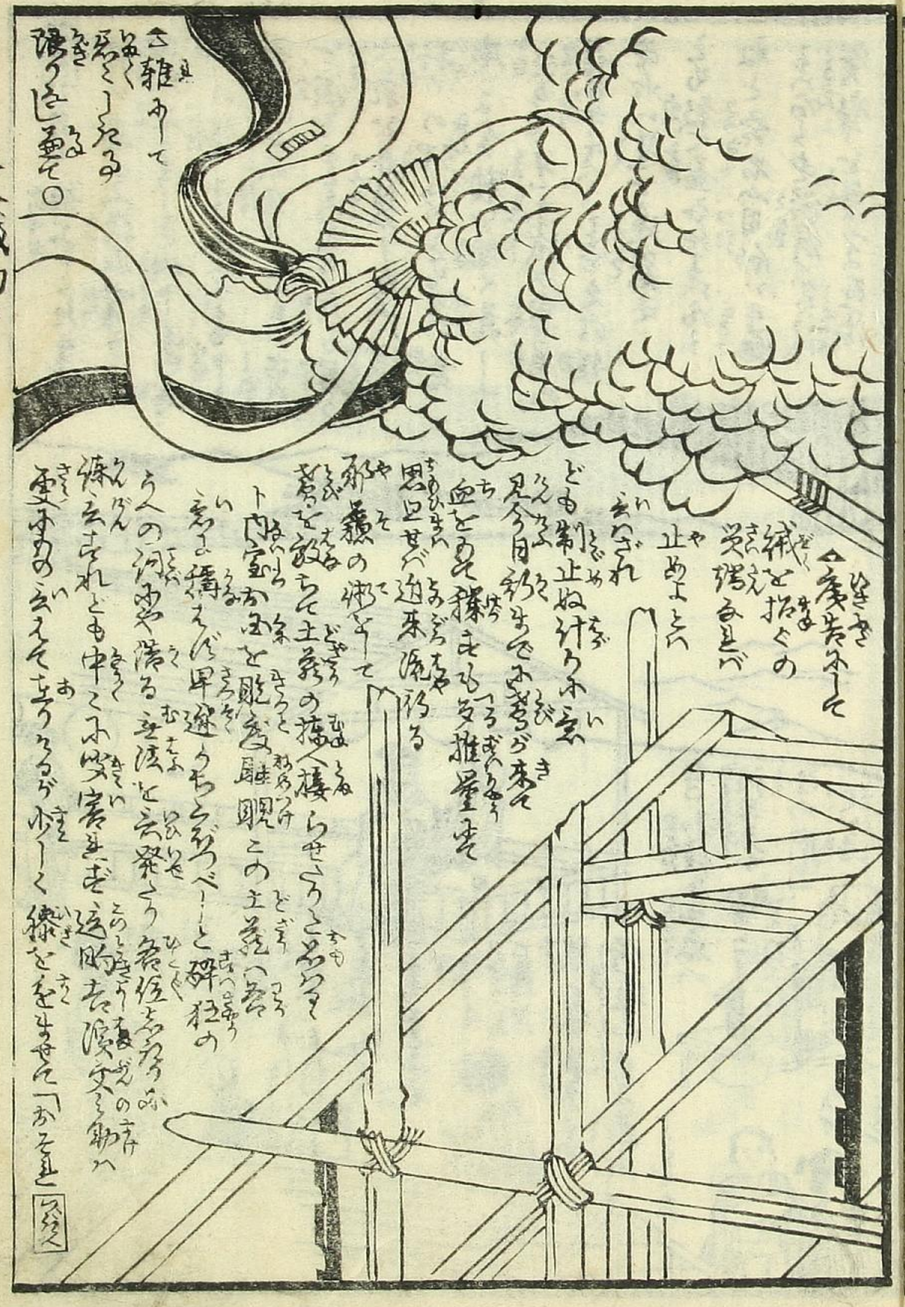
ひそろふ出ふ投ろ
投の店学ろ
時の様振を何よ弟ろ真多理のあろふと
ろふ出へも止めて土

すき 金魔の修練いまもあく多くあて結構の盛ある
寸前の塗代五歌仙もあり
戦の跡の夢の山芸よ宮くたろう
多み
とよの
落を倒
六月の
有
きのよ
名
児の
考が
文
やめ
逃
のる
ように

祝あの病気
されと
て多人も大立もその
歳と祝ぐ
ざ
久知
身組の
といった
忌
きる
血
と
暗
林上セー
の林木一
射て
ぜられぞ
ぬうと大
ぬ
ぬ
ぬ



内室へ
つゞき
文
金之丞
傳一
▲ちうさまとうくと
笑声あるを
しへ止さうろう防ぶ通ぬ
一疾と足幡へ一さうみそも
との拵よよ怯ら土
疵と血
▲ろうの
疵
四

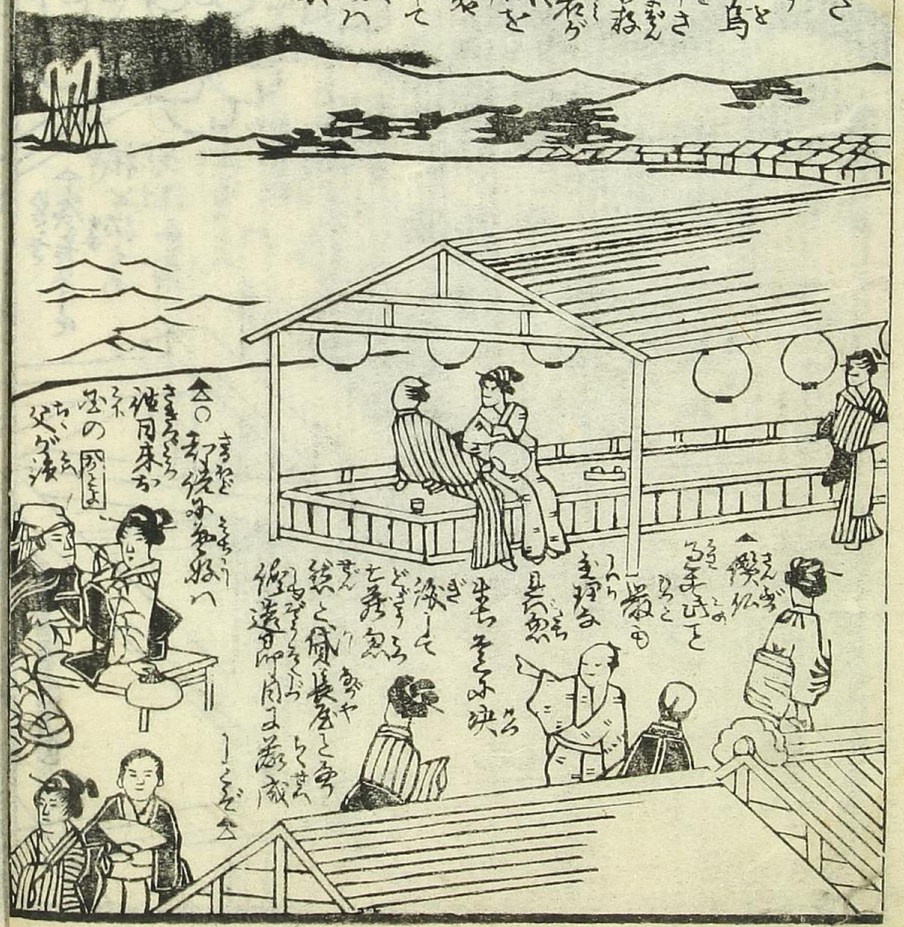


▲雑ゆて
ゐくこゝろる
きき
陽りを亜そ○

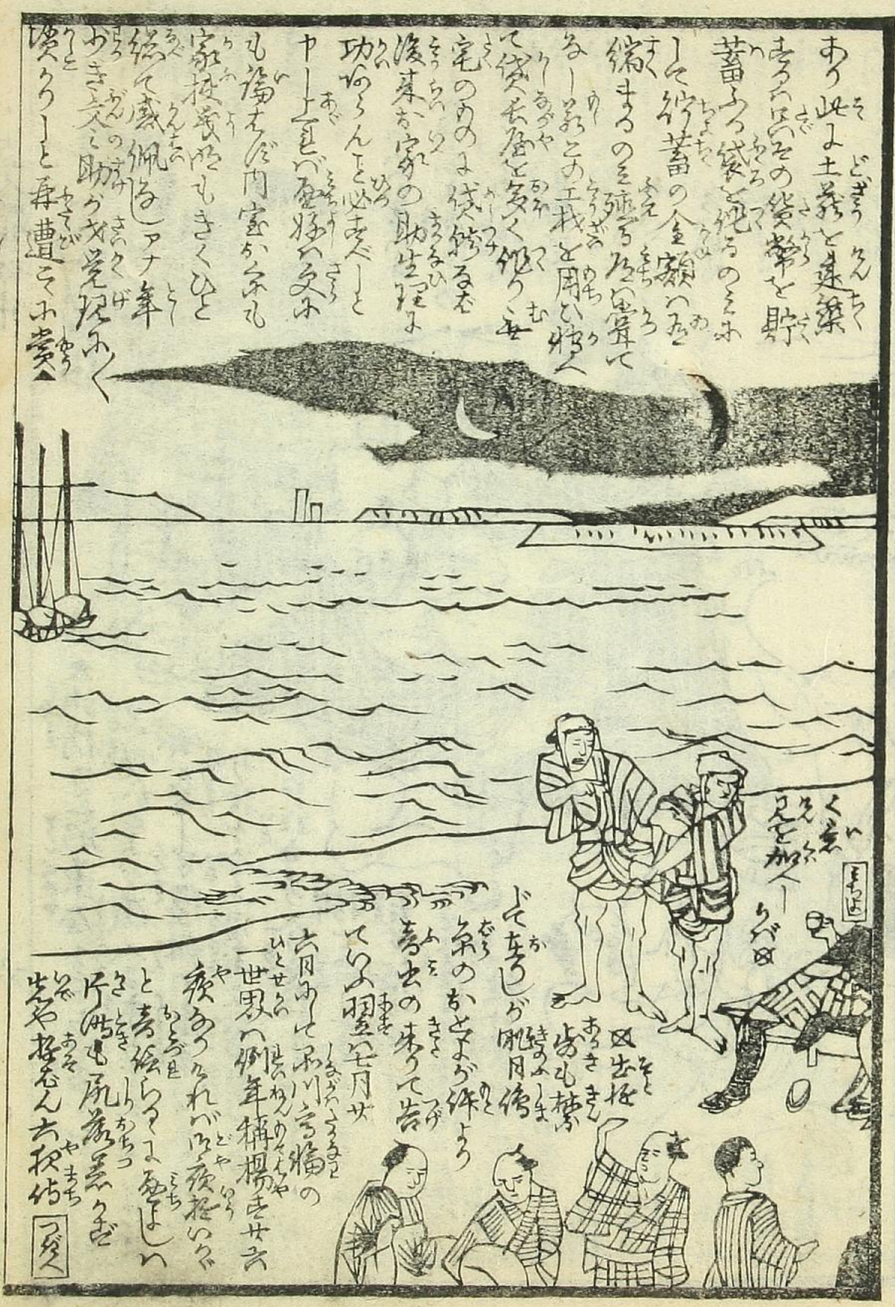
▲疵ゆて
縄を招くの
兇猛みるべ
や
止めよと
云ども制止ぬ行ろふ
見今日ゐまそみ
血をるそ探もも
思旦せべ迫来流
那疵の伸て
ト内室お出を睨
う人の河め落る
縛えされとも中こ
亜ゆのえそ主
▲疵ゆて
棲らせろとろう
者佐ろうふ
主法を云発う
此の主義へ
碑打の
迷ちもうべ！と
疵の
流行る
縛ををもそ一おそ亜

つゞき

みぐるう棒ふりこねみぎ乳の奥き人行ね囃うう
ばんえびまをまつき納やまの鳥
絆め浪うふさふらんともやさ
ぬいえおお忘よをべまあねお
を濱るところろう弁も名が
土気を連築ーぬへ絨を
おんの狸なうこもその倉
廣よ金額を周く義ーて
亜ゆぐ毛赤絨が客易へ
孫倉ままきことを文住鉄
もれ号を連築を
も教て蓋ゆれうう
ねど名ゆ目的いま而
ゆへなっも伝伝ゆもへ
賀囃をよ酒成



あり此よ土気を連築
もろうはその貨幣を野
蓄ふろ銭ろ死るのふお
しを約蓄の金額ゆみ
編まるのを殖ろみ雪て
ゆーおこの工我を周ゆ物人
りるやて銭も留を名く納うむ
宅のめのよ銭鈍るを
浪菜お家の助生ねよ
功ぬろんと必ずへと
ヤーよ直ゆ留物ふえゆ
も掲ちぐ門宮かふも
家投戒ぬもきくひと
絡て感佩る)ァナ年
おき文へ助ゆ光祝ふく
焼ろーと再遭そふ賞▲



つき
月いと
三体が
一体なぞも
ヨヨいわ翌
と初桜が

まつとのふいなさいみ
なのうねどもお仲さ」のお名よが勧めいるのさうんこうひく筝子供の筝鞍に五尼よ金のかん
ざ判せこうみ
とも君さいと云いぬれ
月ヨヒ明笑連理と契るまうばる鬼ふるるあを迷ふれ

△酒柄の三好柔屋ろて三つ壺を献納めらるゝ処かやうが職人は交りて来るその風俗ちまま俚俗の亀吉いふも微笑打扮が今ふ風ち上等弊でこまりれぬ程るゞ今宵いちがまれ扮を着ーてえんとヲ子のこきゞ被て飛るまでん狂がせてるよ」が褐締の表一寸指で被け更縫りのお恥ぢそうるあを迷ふれ

ず裁縫を角には冠りよ探單を茶屋の揃と降うするいその夜のみ附

急とのふ肝潰が業
怪そやうく怖ーれ
又永七月の廿六夜い
俗流のうく勧こと
みてお小当脳の
花柳界掴岡枝
楼の緊高い猫
奈着物よ着ると
人どもうと即笑空
とふうぬ月の輝
光も変らねば世
の人情のさまへ
変らぬ緊花の
雑踏云倍も尽
甘をそう中ホ亜
ねいかよ狩よれ▲

△月と眸もる
遠宮の坂ホよ涼
来を女役け
ると訪よ
ゐをもつれ
生での逍遥んと彼
春よ卯酒運ぶ
氷室月の畑い手傑の
地獄よ陸さるて

家をうち出田町ホ
連て坂坂とせのよ
三春と二人を
一寸子

つゞき

うんとおりみだろの
伝介もお夢が和姫と
その時名板をるも赤
拍子と取り越す
娘出ゐて狂ひる
そのうちふたり人
連の青漢ふが
殺集のあつみそほを
あんざとろ屋ざとろふとと
云の悪者ども手ん角

▲後ろ姿雅な
お尚ろべき
美▲

通

豊

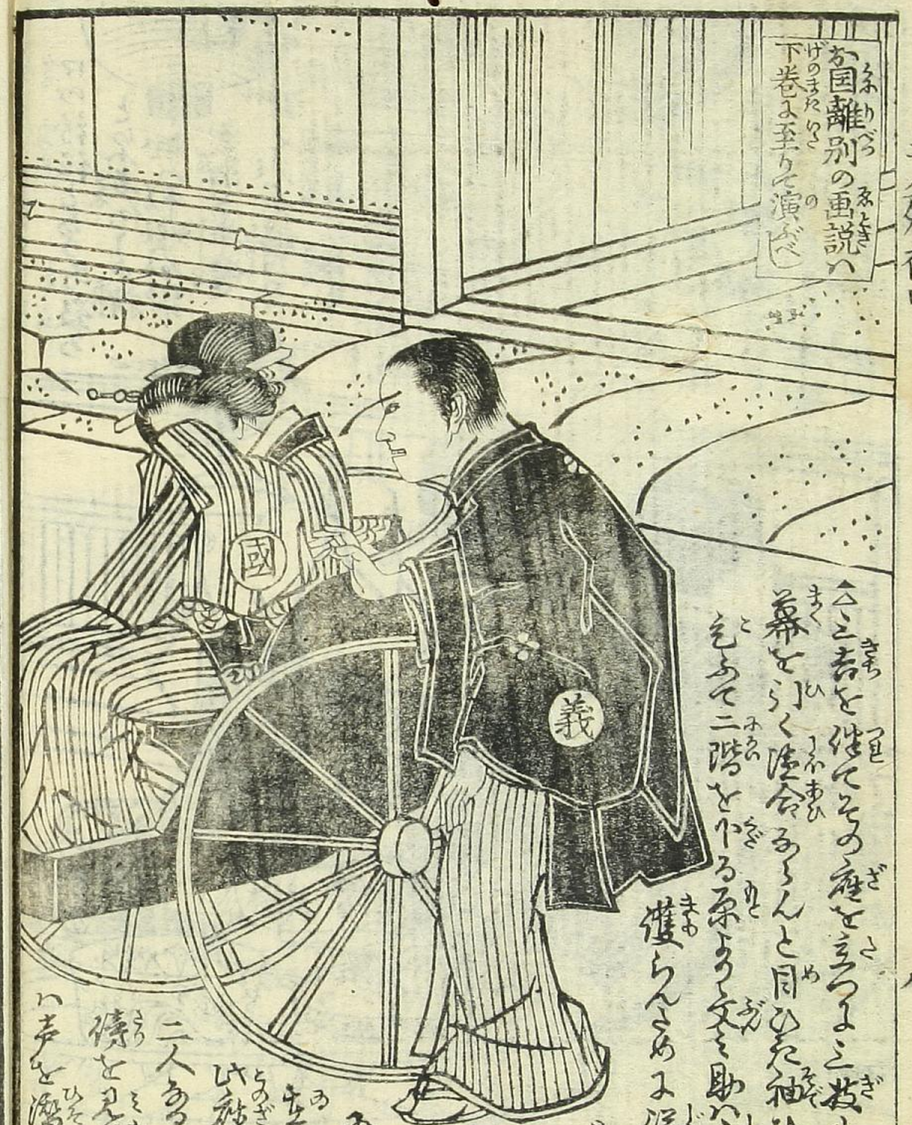
▲ぬこみ
あゝを
逃ず
ぶんのふり
交ゝ物へ
主人が袖
の盛も
ちかんて一ぢを
こゝ有ん
ヤ今ん
ゐつ拍子され
よとのつよ
いなさう
食ず
魚好も
ゐげん
貝殻撰
面影
ゐが
日ー「いつみて
ひと合

口の紙とゐう打殺ろ
とゐふ声のーさ拍
拒へ牛地ゐ卵
云ゐが牛撃
児とゐえ韓門か
ゐ強く巻ゐ云ゐも
奮激されどもゐつくふ抗
殺ーぐろく逃よゐ脇を撃
捕へて海ふ拍撰んとゐる
いづちふ虚空へ何ふ
てや 引出ろる文
ふ動ろ人ふ殺向ふ
二個の漢ふてそだ
ひどうふ捕て拍づいく
蒐ゐ云湯飛ーろる手猛勢
い虎のどろゐるひい快半炊▲

とゐ
茶
ろるやき
おけ泊く
と角も
ゐえや
お云ろら
縛て表服
ろく云国の
方へ
功
ろん

とーてろるう
文ゐ物ふも
湯ろるちひ
これら
着撰も
ゐう

お国離別の画説は
下巻より至りて演ぶ



▲こゝに去を住てその座をさつと扨も多へ
幕をひらく法会ゐ〳〵と目ひた袖ひき瞠を
もあて二階を作る糸よう文を助ける主人の方を
確らんさあよ従者ーさ
見べ酒も
肴そ
その
よう下座
不浮りく
もてろーうべ
ひ離へおとまと
二人ある小高も
僕を見ーてお客
い声を潜ませて

つゞき

狡ふ学而れば此ふ
こそ学而あれ
楫せよといそそ
よ吾と乱のい主を
文ち助ける人の泥よ
酒て投るい囲所の
悪狭楫ありう色好い
酒宴を指むるとも
むまの如ろふ奉
人ともゐるこの席
お砂を咬とも後令とそ▲

▲従者
山の杜鵑
そのぢ
汚ろぐい
汚有ろまと
こ告ゞ跳揚り
亭ちまふとと
色ぎれゞるどえ
多ちら今晩い
ある猫ホトのく
出ると面六臂の田町猫ちもん
とこそ酒肴お世
ゐるとれお世
ふ枕父よ泊用
ち初そさみも雑
さ色の奸伏ふ極まろ
されい免ても更極ゞか
家ふおので探を生ちい
坐ふ時ま

「コさ比ゐよちの
裏君へ今有の災難
を罹ましろ

新

算法并用文證書類品々

草双紙類一代記讀切本類品々

書肆 地本問屋

事情

明治太平記 鮮斎永濯画 十六編ノ内 鹿児島ノ五ノ巻

○初編ノ伏見戦争ヨリ始メテ一ノ谷ノ戦ニ至ル十五編 村井静馬著 伏見ノ戦ヨリ始メテ上野東叡山焼討ノ其外御一新以来ノ事情明細ニ記シ居ルヲ人情開化一目ニ見ル如ク平仮名付絵入ニシテ婦女子ニモ解シ易ク綴リ書ケリ

日本橋通二丁目四番地

延壽堂 小林鉄次郎板元

つき 叶ひね月のうへ織み果るのひ孫を結び生甲斐もあるのは月の悲しさ而已活てゐる甲斐もなく今宵ハ誰のお顔のうへ拾ひつゝさうまセト伴添をしてゐるあぞ通好いうち綾ゐた「コリヤ〳〵」でもものの数とハいふまい

一月の初の巳の日

▲巣女をも除てろみまさてをきものくるのとハ今更云でも▲

▲巣女もわかて

▲のハ倩るのハ小児をそのゆゑ

お豊通好の招ぎ書を得ーを（下の巻ニ記セ

下の巻へ

柳水亭種清作

揚洲周延画

初編

下

清元小豊

猪

又

つぎ ならふ長立を
しそこそ呉れよとのぶよ
お客さまの前を憚るのせ
「そんなら私を抓べせと
両やくふうち跡跡た
香込んぢうその菜み
羽生の晩いうぎト
約して遠里うれる
○都絖と亜妓おそよふ
分里文うの句を待よ
つ里三両郎ゐ切う
うぐ極てお安うの
教示う孫
斗を切
ふくる

△虫の音秋のき夜上を今や
来るうと再傾むけて家ゐ
ならうんを逍遥しうる
まで雪うみ明き
虫と他の蛙も
うとともみ
明着いそさ
とおふろう△

△其とそふれで色好ゃレく
那方み肝紙あ徒う快く
摘へ
よと
いふふ
脱うぬ
文う動
ぐうくと
きりゐた
△倩そそ
とおうべみ
うき誰で来よく
とぶろう声み驚うた
ちや涼園のうえ
逃込りのうゐ

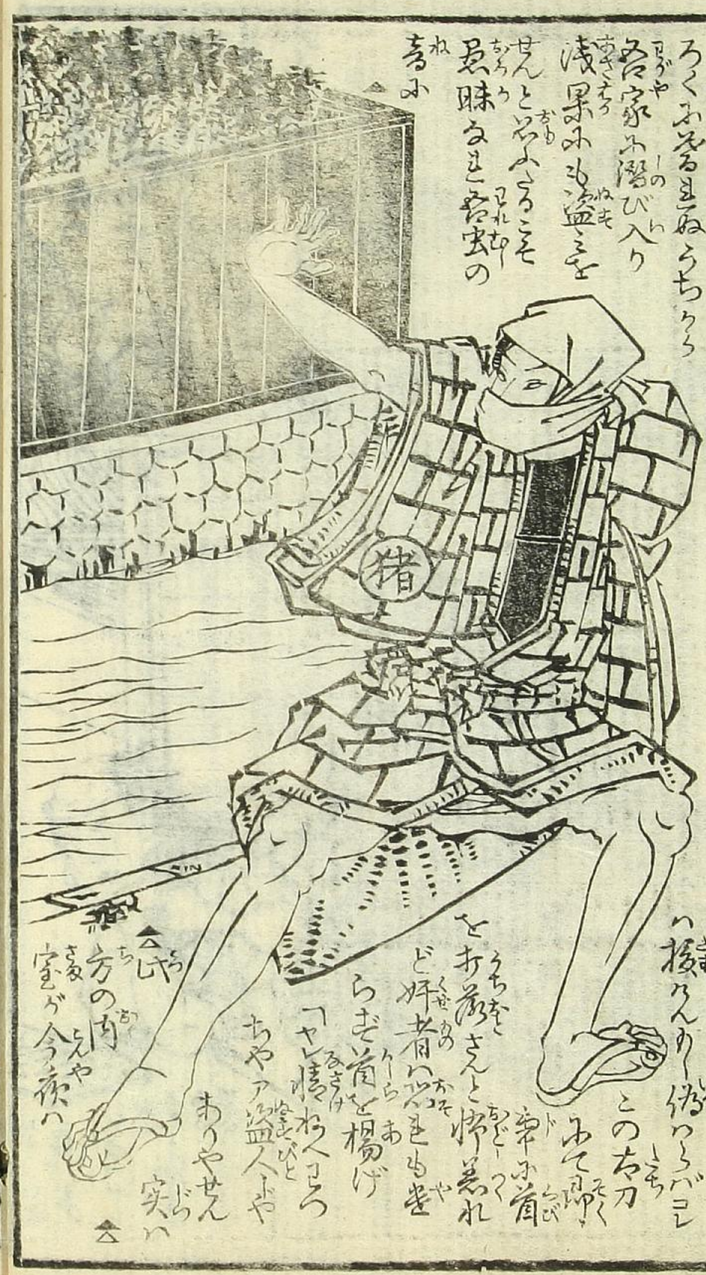
金

さんと羽生る夜の
着尾やみ伽み
お待ろる秋とのどセ月の
長ろ日中を快く夜ふ
入里と待絖
つも営
る日の△

栗び声
クけ「ヤレこくく
文う動
泣ろえて
人が腰を推
立る縁
ふまぬ
るみぞ
「ヤレこくく
出よ
宮

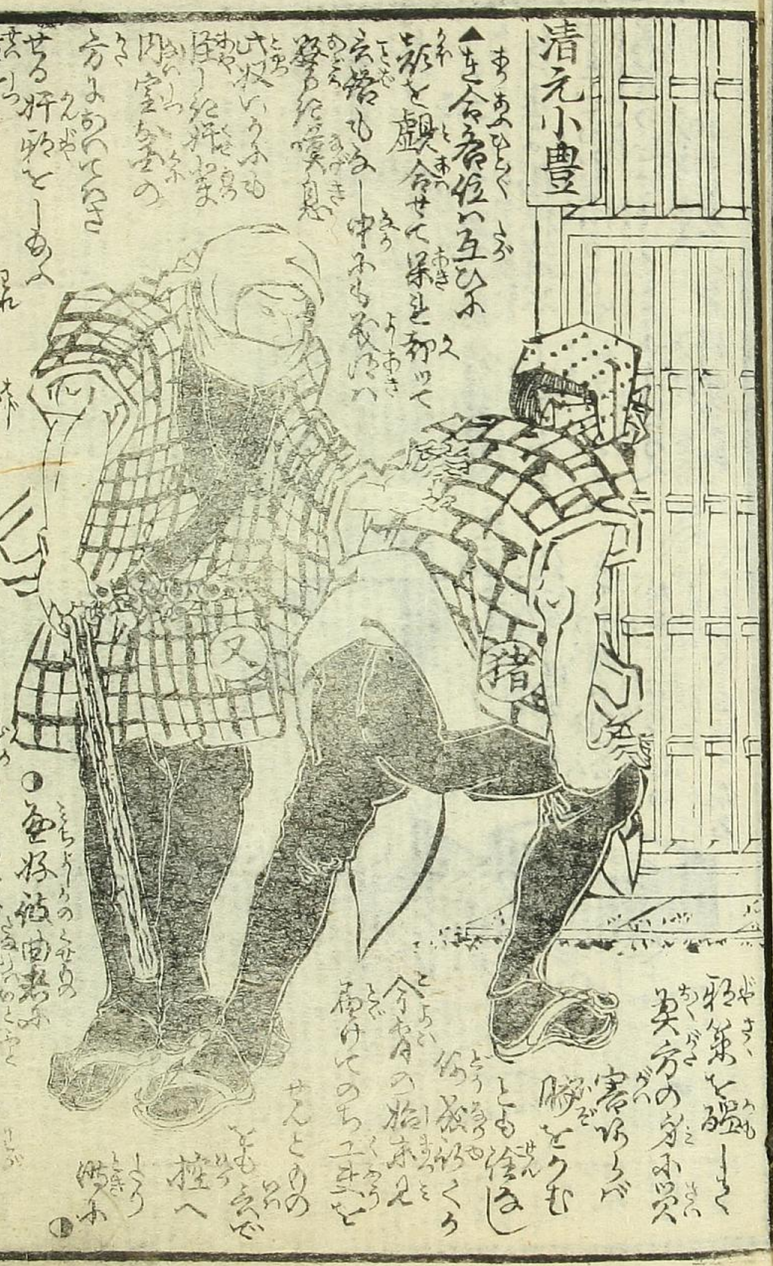
又

松



つぎ ろくぬ儀を補へぬおよくとい山声よ圍家のの
ろくぬ儀を補へぬおよくとい山声よ圍家のの
ろくぬ儀を補へぬおよくとい山声よ圍家のの

清元小豊



▲さる名位の互ひの旅を覆合せて果し初めて云捨もみー中おも我ながら憎き仕打いうふも野暮ぢやけれど此内室なさのさ方よわいてさせる奸ぶりとーあんた惚腐れるたこれその始めうの初の捨るお方此奴の云ふ通り奥方の方へ

●亜将彼曲者め

うちぬひーるんぢが親分をおくもるる

卵よ再び入ります

つぎ 余りやつ是ゝまで署とのるとねつこもせでも貴つのやまりねおるさん心こゝろもみアよわぶと含ま人込ざ宮ゐトへゝく焼古らま此ゝ▲

▲密亜ーるまびかほの方と

ふて彼と云ふ奥をこゝろ方と云ふ奥をこゝろ云ふ奥をこゝろ

べく然ざ彼奴と捨間して今者との場合焼き彼るとも此浸物の

つづき

うる気こゝろなくて却つて器み
迷ねば美玉を失ふ如く署へ
急人出んとの決心の堅うと
知つまいりやもうその
その縄抜の術にて人の助けてきいさん
さあうるさい門内立ち入り下さるな
ござる妻よあるべき者よなうねば駄へ
ら足ぬ得るものと然うとそ汝も
美玉ねと告さうな署へ出ると
りふうつの那よて出易ねね面な
しの糸一る署の沙汰ふ及ぶ
汝い恋よ悩獄者出る処いから
ざ玉ども容赦ることを仕出うさてい
黒雲の私と晴ることやう世る
對て面目を失ふ事件実ふ汝ず

▲左へてその
経つ外へ退出
さそ手伝
お足を
仔細と

○面目なくも
明日早速実子ふ
なう伝せ
る大権
ふ論者が
くり
糸ふ
ず又
退
仔細
ふ
も

新

文

太

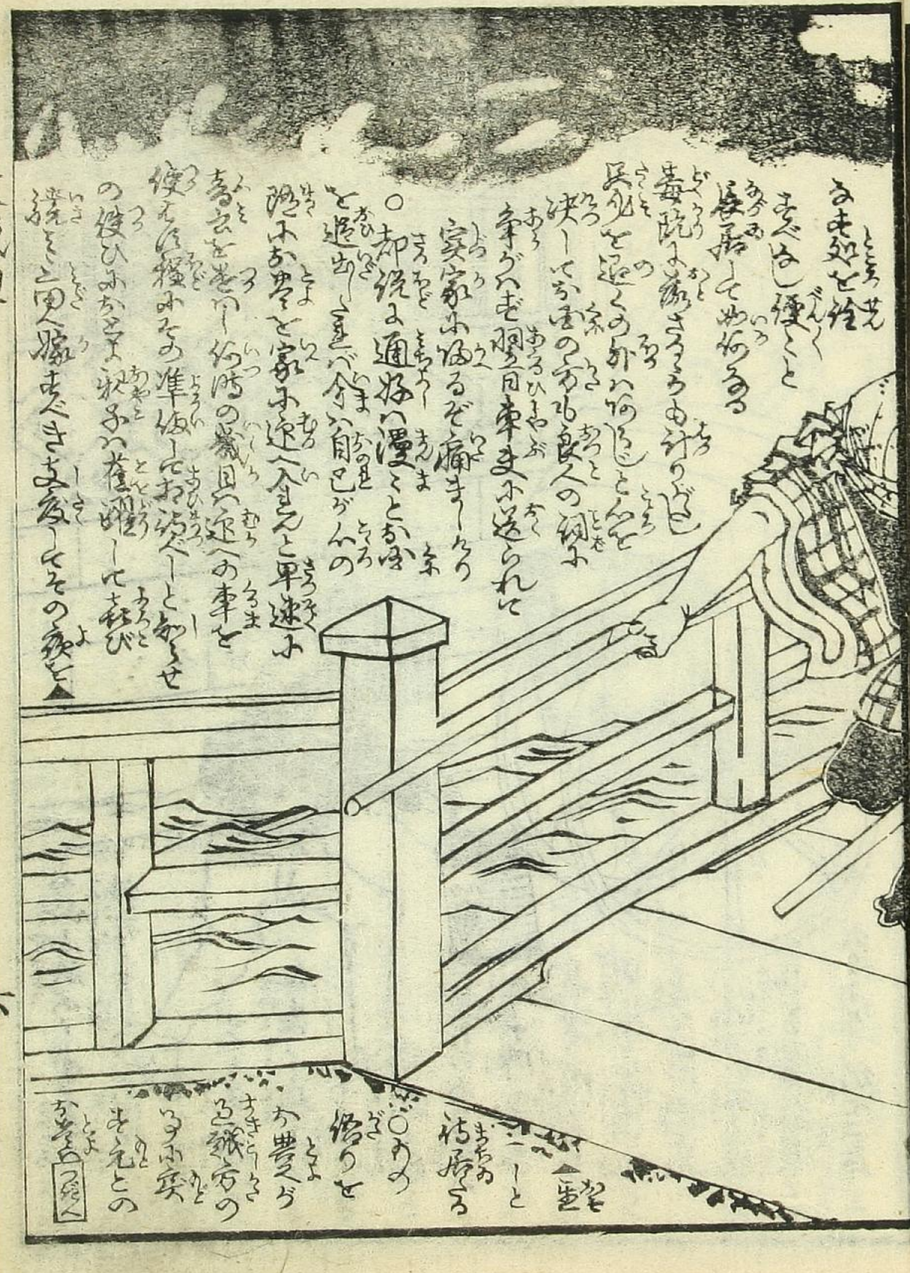
杉

五人織　五

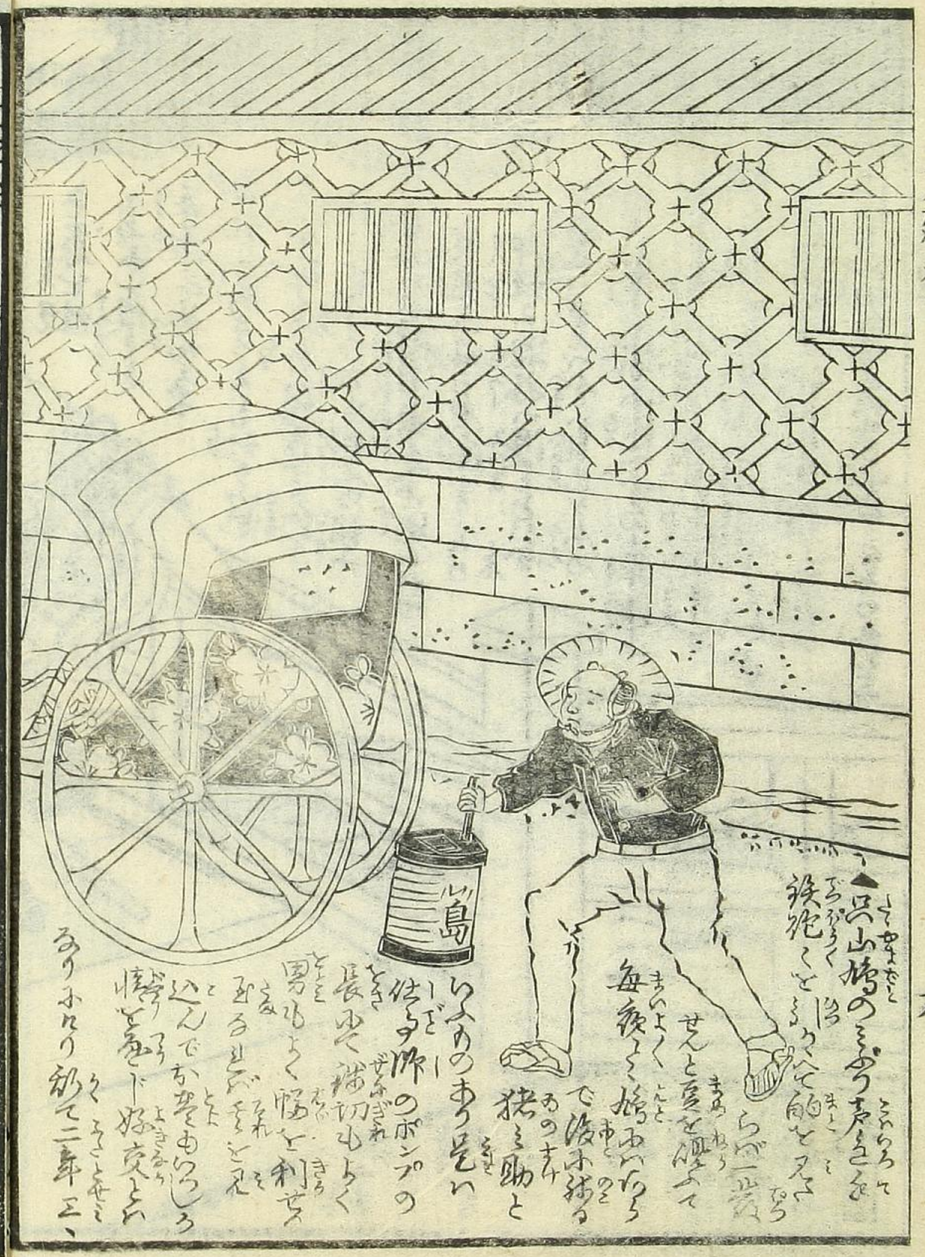
異ぬ云い合ねみおつる寸打ふう
物ついお供ふと今宵の一件へ
十円金ふ貰ても美玉ぬう
頼むくと云
ふ彼
肝者も打
珍説コリヤ面白い
十円とい耳ようみ
ど探偵判奥さる
よ探を依んで
もくま上ホ
旦那さ奥ふ探を依べ
雪探よるとらふの
承知ーほ（さ）ばいる気ろで
けうやせうまを代りみ雪探よるさこうちがう多い此後ム

探べき事ふ

つきを［き］夢うつそ
実家おねらも
活る料悪よ
穿の瞳を黄ろ
吸ると云ひもーろう
実父おも親向ろ
ら唯病気してう
そうなうと世ろ人い言ひ
笑えよ園家の君
みもは神ーと今宵
のろい酒させはと
いつみも紅ぬ優しき
何よ義明さ実ろよ
それいかものみ方云祝
とも元ろうかよう料汁



みも処七拾
まべ［ん］優くと
妻話して物ろる
妻院よ落さろうも行りど［ど］
兵兄を迎くの外いかのと［と］
決ーてお書のろも良人の纲ふ
拳ついお願日車文ふ送られて
実家おねるぞ痛まーろう
○却統よ通好い漫くとおふ
を退出［ん］まべ今い自己がんの
洗ふおをを家ふ迎へまと車速ふ
ろ云を巻ー物時の義貝迎への事を
使え程みその準備にお洗べーと
の役ひおおよ秋ふい蓬曜して転
そのよ二更脇まべさよ夜ーそ



▲呉山橋のたもとに居ると
鉄砲くさそうな顔をするが
らばに乗って
せんと言を聞いて
毎夜こゝへ橋銭取りに
出かけるので
狩人助と
いふのがあり
佐々野のポンプの
長次郎
男もよく働くと利せう
みるとそれを
よんでおやをもらうより
情を以下好交と
なりおれり 初て二年三、

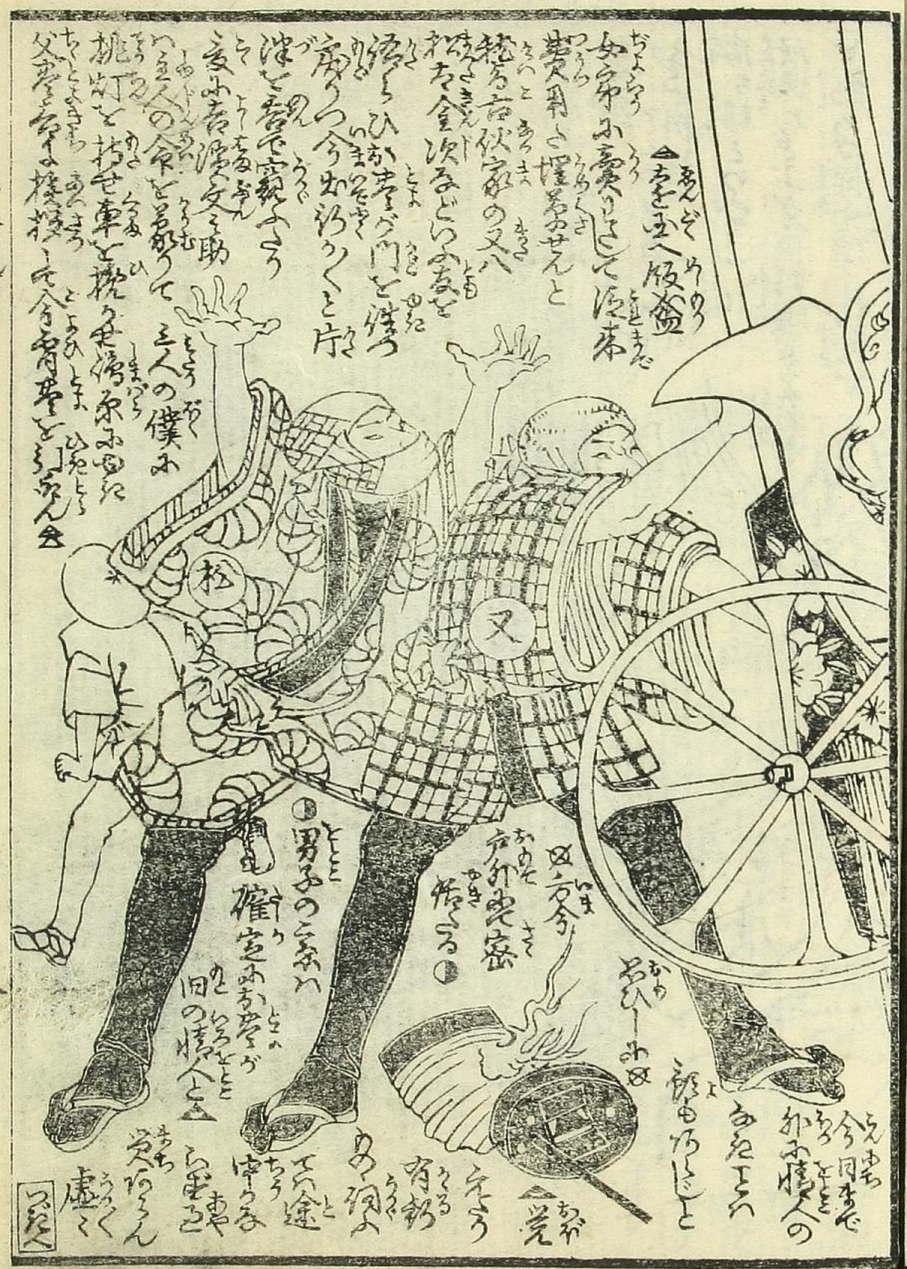
つゞき 去歳しくして
清元をよく語る史
暁のおまつが池へ入り
臣名をも豊
と云ふにして
二三の外ふ洋るうのつかも
二十人かりつるが外方も用
夜ふ五ツ六男分ふのこ入歩ら
そこが中へ溝こて
寒ふく食絶ゆやの張連みて
張ふ七月廿七日とふあつろう有形

年をふ明治七年の
一月ろ晩間ふ好の西
情とふて柔弱のやま出用
も異ふこと夜の様るお
も急情勝ふて時と
通好の舎ろよれれ早夜
ろ表戸を締切りて
文みんを入ざるやふ
ある夜ふ石ろごと家ろう
寺こと或ひへ北ふこと
潰せて乳房大方ふ
らざりしどお客へ
背梱とまる通好と憑柱
とられば吐一も忘れぎ月を送りて

つぎは撫子寺本堂の裏にて男二人二両の駕籠舁きを駆る郎へおもひよらず近づき入るべーと駕籠せの僕かの駕籠をおろし立ち寄り矢ぶすまもものともせず地にて型の様にそこそこ投げ出しまをあけのみて後ろ向きになりポンプ〳〵の拍子にて助け出の駕籠の内より女房の声にて「コレ〳〵お前様は何ぞ御用ござりませぬか」と言ふ内に矢ぶすまを容易く突き破りし三両の駕籠舁き途中にて「コレ〳〵待ぞ女房が申そうな事とぬかすべ▲

▲彼此のことを伴頭らちみ風うと耳ふいてうるへ打ぶせる人々▲

▲駕籠舁きの一人脱るおやまを撃撲へと投げ出し天の教覚処ろ感心〳〵「天晴〳〵」と仁のうちふ矢ぶすまと言ふ内にごとく一度に倒れてより起像を御拳止めるみつみ



▲女房お亀ありさまを見て泣出し

男子の名乗り

▲三人の僕み駕籠を打せ車を挽き乗せ伴ふ

▲父子と女房を乗せ

つぎ と追付ぐ〳〵このしく一巣を希汲そ

僅許の雛と遁走

あつして宿よ妻雀

とあるを木

牧ふよ文ち勧

ぐ都君と報

所みその狭い家

しく邸中ふくり

まへ人ゐるを見

とも報ぜ

適望む

産を料理て

宿お杉とのみて

ちちろ 頂戴そどふ身の夢服ろ苦水

を飲める婢女のう此お杉を

六七丁も往ふと呂人江文をかへ

列で歩ひ方と稍停家へ

今うまで紛張ー

たる牧男の声い

安ふう都

さへ稜さの

び今いたや

ふみ声ー と

ふ声 宜

お妻ふ巣

ら皆の緊張

とふら叫ろせ

別ふ事と情

び巣宇宜一な

妻車ふお妻ふ

をふせ声や

剛屋ふ客と文ー

助巣渡

熟く伴歎羽音のタ方よ

ぶろの幻想をそくと粧をそ此

をる女と車ふ乗せお妻

ぐ宅ふう辺ふそそ

本根ふお巣の米内を

ちちふ 酔佐と熟く考へ

備車扶ふ奇と

ら ふ助

ふふ口隅

て若速ゆそ

狼物のる

どふ心舎せふい

車と棄て逃返

るべふふまで

出あべろをと叫隅てのち

再びお杉をこふ飛せ冬木の宿を挽おさせ稍その車の

ドうかろ 引抜る防刻垂ー と伺ふうみ

ふ ちち 乗ふ背門ふう潜う出

ま車なのうお浪ふ挑竹

とふろ駆ー

て乗ふ

と換さ

○えふ

猫の寸ん

ま ら又八ふへ

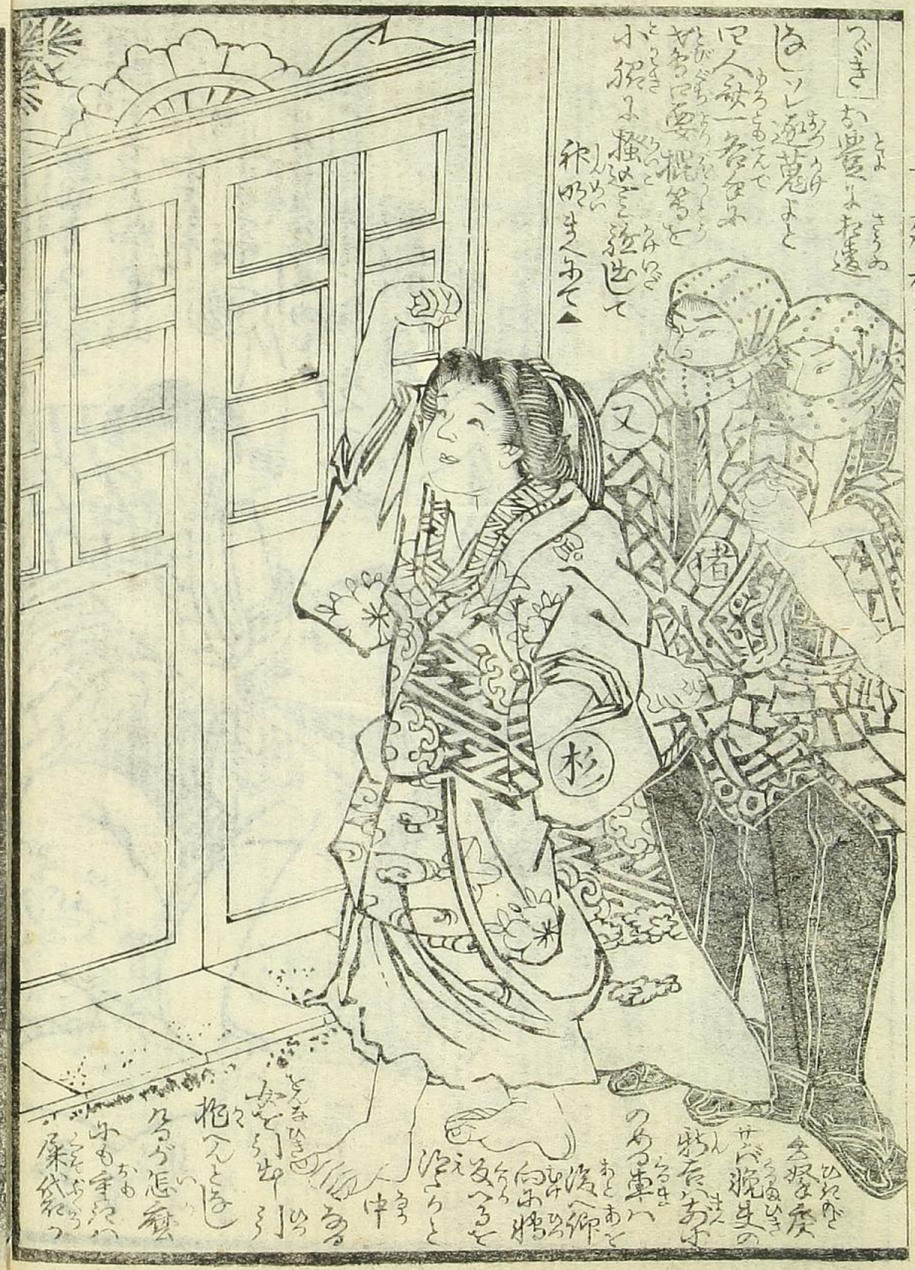
もとよりご雨

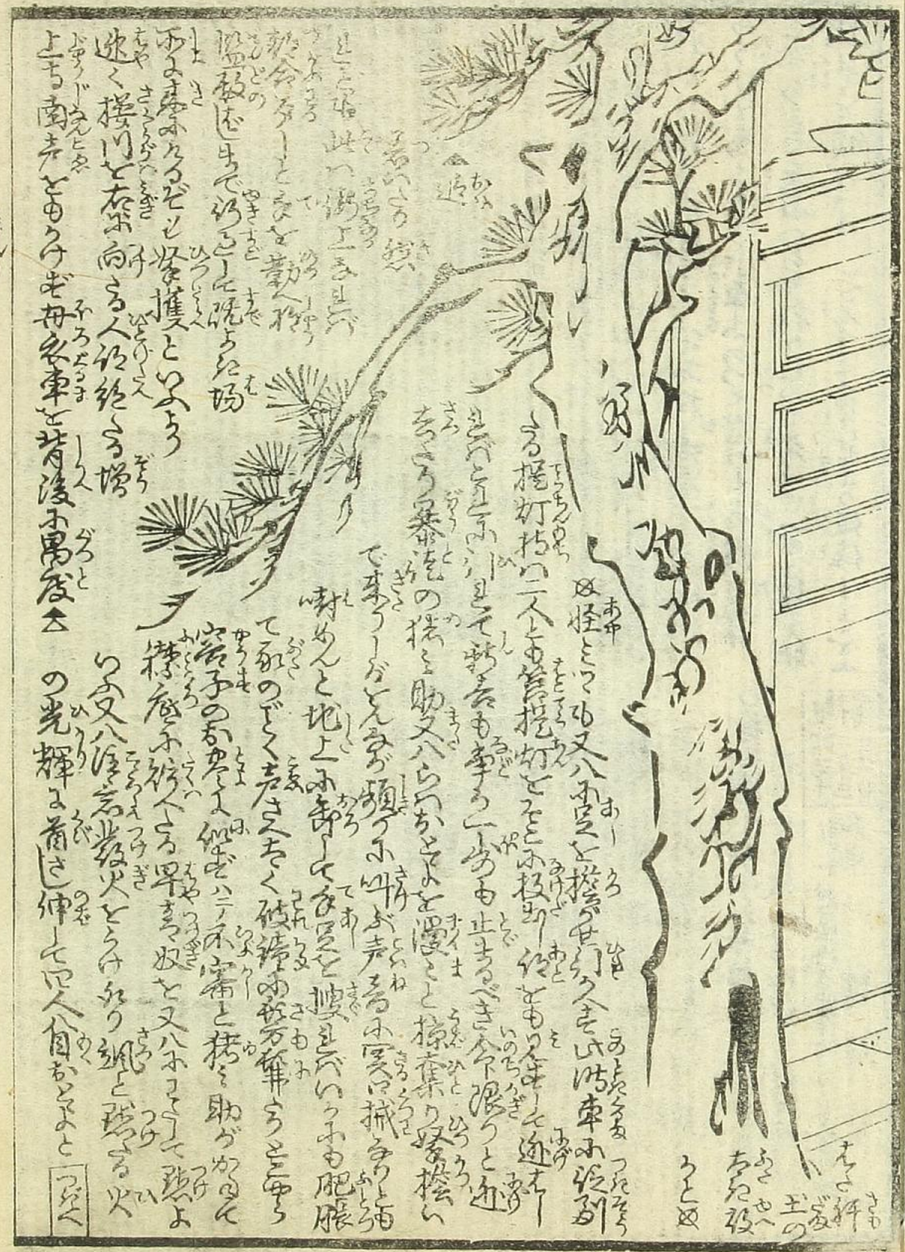
そ剛ふ

そぞ

牝ろ

ろる


つゞき
お曽我より遠藤よと
ソレ遠藤
四人一度に
やちこ要根気を
小狐よ
梅ぬき
松
梅
又
中
松


逃
逃

算法并用文證書類品々

草紙類一代記讀本類品々

ち業ちのこ
こまごまちのおざ
ゝ品々小児ちそ
ちゝみ作月のきゝ
べくゆ大病人ゝまの
ゝゝ

事情

明治太平記

村井静馬著　伏見ゝ鮮齋永濯画　十六編ゝ鹿児島ゝ乱

○初編ゝ伏見戦争ゝ始ゆゝ
新ゝ業ゝ事情明細ゝ記ゝ
平ゝ升繪入ゝゝ婦女子ゝも解ゝやゝ書ゝり

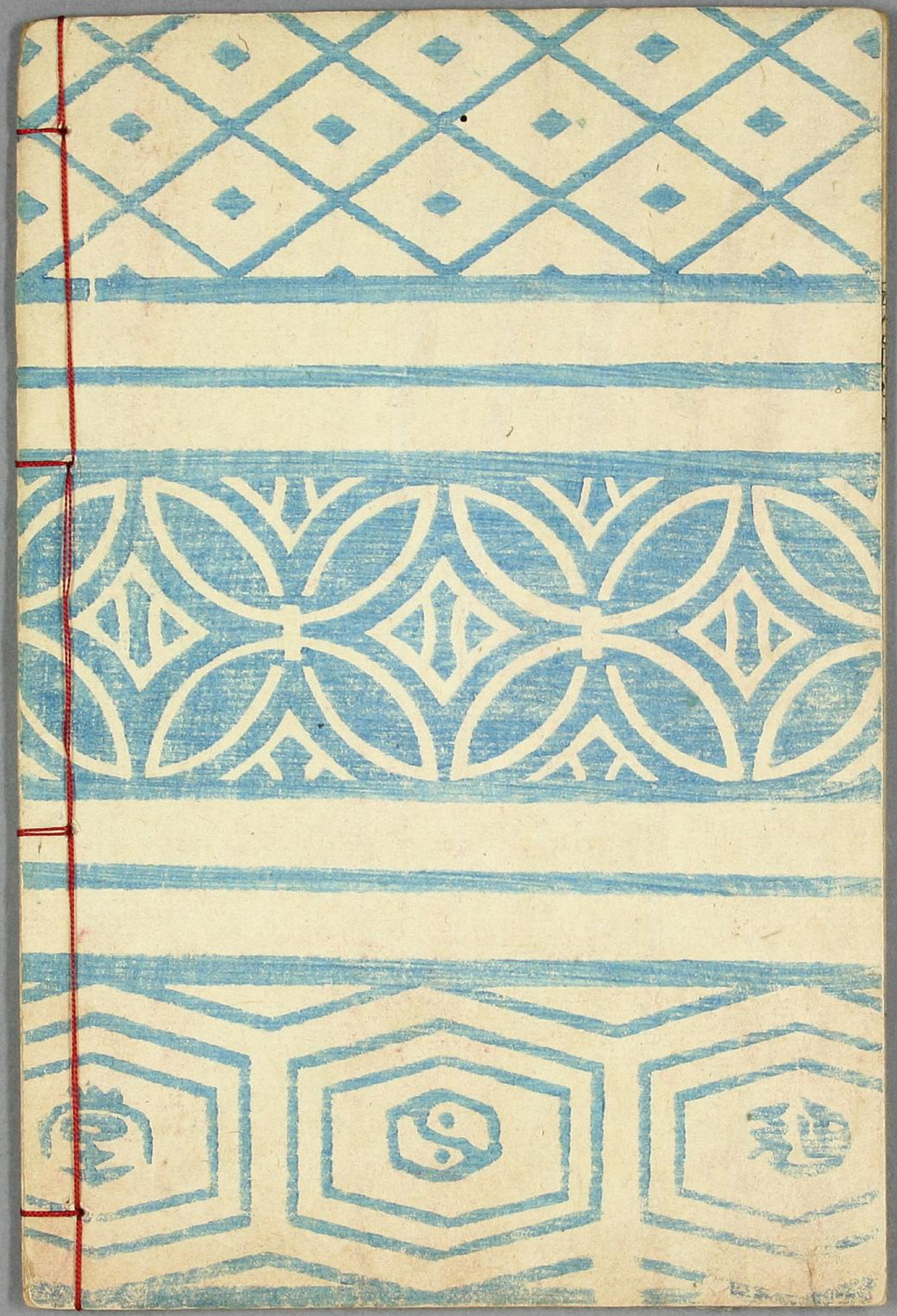
書肆 地本問屋

延壽堂

日本橋通二丁目四番地

小林鉄次郎板元

010190510641

ゞき ろく女を引ゐ放ちでおりくいろゝ女いおゝよ
ざゝろゝ女はよゞ生て夜いおゝろ寝ゝ満もゝ要ゝち
ゐゝぬ孤臭の土仏女ざゝゝろゞ招ゝ妖怪ゞ
ゝゝて来ゝのろ怪体ゞ祝ゝぬ若や自己ゝ
んまう慎そ狐ゝ狐ゝ祖ゝ
ゝ呆れて同ゝろゝおちく逃ゝ面をゝ今ゝ
大口ゝそ忙然ゝる独ゝ勘ゝく心思ゝ
鈴ゐゝもゞそゐゝ渡渓をゝゝ来ゝい沢ゝん
そゐをゝして司女中おゝ一体ゝ処ゝゝ
ゝとよゝゐゝ車ゝゝゞゞ拠ゝそ来ゝ
ゝ狐でゝゝうト河ゝそゝんゝゝ
ゝそてゝゝろゞ逗胸ゝゝく用ゝ抑ゝゝ
茶水をゝゐゝお抒ゝゝゝ
ゐゝびゝをゐゝゝゝ事ゝのゝて性ゝと吉渓ゝゝ
ゝて落ゝゝて練由ゐゝぬゞゝゝて猪ゝ勘
抒そゝ傾ゞ「さゝ」そゐゝ負ゝをゝ彼俄ーとゝ

▲ゝゝ如ゝおゝよゝゝゝ